

修士論文研究ノート 『哲学宗教日記』における ウイトゲンシュタインの信仰について

著者	馬場 美奈子
雑誌名	筑波哲学
号	22
ページ	154-156
発行年	2014-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00122580

【修士論文研究ノート】

『哲学宗教日記』における ウィトゲンシュタインの信仰について

馬場 美奈子

序章

第1節 本論文の主題と方法

第2節 本論文と鬼界彰夫による研究との関係

第1部 『哲学宗教日記』以前のウィトゲンシュタインの宗教

第1章 『論考』期のウィトゲンシュタインの宗教

第2章 1922年の日記断片における絶望の暗示

第2部 『哲学宗教日記』における信仰への道のり

第1章 『哲学宗教日記』第1部 自己認識の試みと絶望の自覚

第2章 『哲学宗教日記』第2部 新たな信仰への道のり

結論と今後の課題

本論文は、ウィトゲンシュタインが前期哲学から後期哲学へと移行する時期に認めた日記帳『哲学宗教日記』を取り上げ、この日記においてウィトゲンシュタインがどのような信仰に辿り着いたかを明らかにすることを目指した。そのために、本論文ではまず、ウィトゲンシュタインが『哲学宗教日記』執筆以前に、信仰についてどのような見解を抱いていたか、その信仰に対してどのような立ち位置にあったかを確認した（第1部第1章・第2章）。次に、『哲学宗教日記』におけるウィトゲンシュタインの記入をたどりながら、彼が信仰をめぐるどのような問題に直面し、その問題の解決にどのように取り組んだかを明らかにした。そして解決の結果ウィトゲン

シュタインにもたらされたある態度が、『哲学宗教日記』において彼が最終的に辿り着いた信仰であるとした。(第2部第1章・第2章)。

以下各章の概要について述べる。

第1部第1章では、『論理哲学論考』執筆期のウィトゲンシュタインの、信仰にかかわる思考を先行研究に頼って概観した。この時期のウィトゲンシュタインにとって、信仰とは「生の意味そのものとしての神を信じること」であった。生の意味としての神は、記述可能な事実の世界を超えた、語りえない領域に存在するとされていた。また、ウィトゲンシュタインにとっては、神の命ずることが善であることから、倫理が信仰と不可分であることも確認した。

第1部第2章では、『論考』執筆後のウィトゲンシュタインが、自身の考えた信仰に対してどのような立ち位置にあったかを、小学校教師時代の日記断片から、明らかにした。この日記においてウィトゲンシュタインは、「すべての地上的幸福を断念せよ、そうしなければお前の生は無意味になる」という命令を神が下すかもしれない、という思いに襲われる。同時に、彼がその命令に従うことができないということも自覚する。つまり彼は、いつ自分の生が(神の命令によって)無意味にされるかしのれない、ということの思い知らされたのである。ウィトゲンシュタインは、生の意味としての神を信じるという信仰を堅持しその中に生きていたのではなく、無意味な生という絶望へ陥る可能性に常にさらされていることを認識し、恐れつつ生きていたのである。

『哲学宗教日記』執筆以前の、このようなウィトゲンシュタインの内面的状態を確認した後、第2部第1章では、『哲学宗教日記』第1部(1930年～1932年)におけるウィトゲンシュタインの自己認識の試みがどのような結果をもたらしたのかを明らかにした。彼は自分が何らかの内面的問題を抱えていることを感じ取りつつも、それを言葉にして取り出すことができずにいたが、ある特異な夢をきっかけに、虚栄心が自分を絶望的状況に陥れていることを認識するようになる。すなわちウィトゲンシュタインは、善くなろうという自分の努力が、彼の虚栄心ゆえに他者の評価を得るための演技になってしまい、そのため何としても自分が虚栄に満ちた欺瞞的生から脱出できないということを確認するのである。

第2章第2部では、『哲学宗教日記』第2部(1936年～1937年)において、ウィトゲンシュタインが、虚栄心が作り出す絶望的状況からの脱出を試みる過程で、本論第

1部第2章で確認された、生が無意味になる可能性をも正面から見据え、格闘し、キリスト教の贖罪の教義への信仰を通して生の意味を見出した、ということ明らかにした。まずウィトゲンシュタインは、欺瞞的生から抜け出せないという絶望の克服を、キリスト教の信仰に求めようとし、新約聖書とキルケゴールの著作に向き合う。しかし、キルケゴールに倣って、キリスト者となるためにはすべての地上的幸福を断念せねばならないとするウィトゲンシュタインにとって、キリスト教信仰は、手に入れることを望むことすらできないものであった。やがて1922年の日記断片と同様の思いが彼を襲い、彼は地上的幸福の断念というキリスト者の道が自分も行かねばならない道であることを改めて思い知らされる。地上的幸福の断念に踏み切れず生が無意味になることを恐れ続けていたウィトゲンシュタインはあるとき、母の救済を望んだことがきっかけで、キリストによる贖罪の教義を、新たな光の下に見ることができるようになる。それによって彼は、生の無意味さへの恐怖から救われ、自分の生が既に意味を与えられているものとしてみるができるようになる。彼にとって、この生と世界が無意味ではなかったということが、キリストによる救済が行われていた、ということなのである。ウィトゲンシュタインが『哲学宗教日記』においてたどり着いた信仰とは、生をあるがままに、それ自体で意味を持ったものとして見るといふ信仰なのである。

(ばば・みなこ 筑波大学大学院人文社会科学研究所在学)